



# 六 花

2011 平成23年

俳句雑誌りつか

6月号

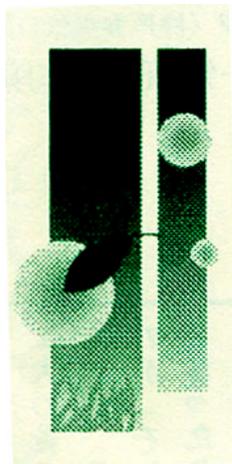
Cover designed by Little Bird

えん  
艶

山 の 気

山田六甲

老犬に見下ろされ  
みる昼寝覚  
目<sup>もく</sup>藉<sup>しゆく</sup>を  
食み  
ゐる  
山羊の乳  
しぼる



梅雨の雷転がし海のありにけり

梅雨出水田水の色はそのままに

荒梅雨や湖の飛沫しぶきを受く代田

荒風や弾かれ飛べる巢立鳥

湖しぶく畦の茅花のしたたかに

梅雨風や羽をすぼめて歩む鳶

荒梅雨や湖水に消ゆる鯉の背

五月晴戸の毀れたる漁師小屋

荒梅雨や葭を呑み込む湖飛沫

夕暮や代田に映る湖の空

梅雨出水湖の真中は平なり

梅雨空の揺るる近江の代田かな

松の根を打ちて止まざり梅雨嵐

早苗田の広がり人の見あたらす

梅雨雲を拒まずにあり伊吹山

湖南より黒南風の涌き来たりけり

田の蛙湖みづみの蛙の鳴き交はす

瀬の音の高みに現るる螢かな

田蛙を背にし螢を待ちぬたる

枝先にしばしば庶る初螢

苗に風止まば螢は飛び立つか

田を囲む網をくぐれる螢かな

生臭き水に螢の闇を待つ

瀬の音の白き闇なり螢の夜

ほうたるに初めて闇の生まれけり

朴の花仰ぎて夜を待ちみたる

釣り人は竿を納めず螢沢

風止んで螢の沢の整ひぬ

螢待つ植田の空の夕づきて

山の気のちかづいて来る螢の夜

雪 卿 集

楊柳 貝森光洋

楊柳ようりゆうや唐傾けし柳腰  
しじみ貝嘘はつかねど泥を吐く  
傷口の経過見ると目張剥ぐ  
蛙の夜あ勉強をもて余し  
煙草の輪顔の上にも春の雲

公魚 松本文一郎

公魚を溢れせしめる量り売り  
野焼して風上に立つ殺気かな  
大寒や着火不良はご愛嬌  
梅が香や二合こな半ちに酔ふ白昼夢  
女坂にて時を忘るる梅見かな

せつじゆしゆう  
雪樹集

ネーブル

空

音

空からも足元からも春光る  
校庭の桜下枝より咲けり  
休み休みして母の雛あろし  
ネーブルの臍ほその消滅二昔  
男気のある花嫁や椎若葉

牛車

蟻

蜂

男の子雛の牛車に興味持つ  
葉の先を枯らせて白き水仙花  
新しき枝の緑に梅の花  
春の雪すぐに雫となりけり  
ビルの床ゆつくり動く春の昼

# 蛍雪譚 六甲

傷口の経過見ること目張剥ぐ

貝森 光洋

冬の隙間風を防ぐために張っていた目張りを春になつて剥ぐ。その剥ぎ方が、傷口に当てている包帯やガーゼをこわごわめくるようであるという。光洋さんが医師であるということをおいて、目張りの剥ぎ方から「傷口の経過を見るようだ」という着想が面白い。目張りを剥がされる物が痛い痛みと悲鳴を上げているような感覚に陥る。同時作「楊柳や唐傾けし柳腰」における楊柳の楊は川柳、柳はしだれ柳のことで春の季題。楊は唐の玄宗の妃、楊貴妃を思い起こし、その貴妃の柳腰によつて唐の国が傾きかけたことへ連想が働く。そのことを踏まえて、「楊柳」を見ながら「くわばらくわばら」と心の内で唱えている姿を想像するユーモア（ブラック？）を含んでいる。「蛙の夜あゝ勉強をもて余し」は、夜田んぼで鳴く蛙の声がうるさくて勉強が手に負えないと嘆いているのだろう。だが、それでも勉強はしなければならぬ。そのいらいらした気持ちがよく分かるが、晩学の苦しみなのか、若き日の勉学の様子なのかは読者の鑑賞次第。